

韓国の仏教説話に現れた童子像

趙 明 烈

一. 序言

仏教説話は仏教思想を主題に構成された物語として仏教が韓半島に伝来されて以来、仏教の周辺で発生、仏教の公布と信仰心を鼓吹させてきた。説話一般の文学的な感動とは異なる仏教説話を通しての文学的感動は、至純な信仰と帰依の念に昇華されること、即ち文学性と宗教性の高い統一された調和感と言える。仏教が韓半島に伝来された以来、仏教の受容過程から現在に至るまで仏教説話は絶えず生み出され、実にその量も膨大のみならず説話内容も多様である。資料としては口伝資料と、文献資料とがあげられる。文献資料としては金石文、僧伝類、三国史記、三国遺事などの史書類、各種の靈驗伝類、各寺刹事蹟志、韓国仏教通史、東国与地勝覧などがあげられる。資料が多いだけ先行研究も多い。しかし先行研究は主に仏教史的な研究、乃至、信仰的立場からの研究だったと思われる。

本研究では説話の中に登場する童子の姿に関心を置いて考察し一つの問題が浮かび上がることになった。それは、韓国仏教説話に表れた童子は、結局菩薩の化現と解釈されるが、何故菩薩は童子の姿に現れたのかという点である。仏教における菩薩は二つの意味を持つ、本生の菩薩と大乘の菩薩がそれである。ここで本生の菩薩は仏陀になるため輪廻転生しながら忍辱菩薩として修行した行跡を意味し、大乘の菩薩は自利利他の悟りを目標とする菩薩を意味する。韓国の仏教説話に頻繁に登場する菩薩は観音、文殊、地藏、弥勒、普賢菩薩などである。このような大乘菩薩の出現は自利利他の大乘的仏教の出現を説話を通して表現している。又このような大乘の菩薩は童子の姿に化現して菩薩の本願を悟らせると同時に、苦悩衆生の済度する内容の説話が多い。各寺刹の創建縁起説話の内容では大体菩薩の本願力によって寺刹の創建を考察することが出来るし、菩薩が童子化現して苦悩衆生を済度した内容の説話とよく知られたのは朝鮮時代第7代王であった世祖大王が五台山上院寺溪谷で出会った文殊童子である。世祖は文殊童子に会って皮

膚病の苦痛から逃れたと言われている。

以上の様に韓国仏教説話には菩薩が童子に化現して本願成就を得たことか苦悩する衆生の苦悩を解決するなどの説話が数多く伝えられているが、以下、これらを抜粋してこれら説話が保つ童子の意味が何かについて考察することにする。

二．説話に現れた童子達

韓国仏教説話に現れる童子像を本論では『三国遺事』を中心に考察することにする。先ずその資料を整理してみると次のようである。

1. 僧、真慈が会った童子

三国遺事弥勒仙花、末戸朗真慈師條によると、新羅真智王の時、興輪寺の僧真慈は常に弥勒像の前で発願誓願したが、“我が大聖よ、花朗に化身しこの世に出現し、私が常に近い所で仕え仕従出来るようにして下さい”と、懇曲な精誠に祈願したら、ある日の夜、僧が夢に現れ“君が熊川水源寺に行けば弥勒仙花を見られるであろう”と言うので、真慈は水源寺を探しに出かけた。一步一拝しながら10日かかって水源寺に至った。寺門の外に体軀が豊満で美男の童子が微笑しながら迎えてくれ茶の間に案内した。真慈は童子に“君は我を知らないのにどうしてこんなにも精誠に迎えるのか”と聞いたたら、童子は“我、又京師人で大師が遠い所から来られるのを慰勞し迎接したのみ”であると答えた後、間もなく門外に出、童子の行方は分からなくなった。僧、真慈は弥勒仙花を探して千山に行って、千山の老人に本人の事情を話したら、その老人が“前に水源寺の門の外で既に弥勒仙花を見たのに、再び何を求めようとするのか”と言われた。

僧、真慈は慶州の靈妙寺東北側の路傍の木下で徘徊している童子に会った。真慈は弥勒仙花に名前を聞いたたら、“我の名前は末戸よ、幼い時から父母を失い姓は知らない”と答えた。真智王はその童子を国仙にした。国仙になった童子は花郎従を和合させ、礼儀と風教が一般人とは違った。その偉さが世上に知られるようになった時、国仙は忽然と姿を消した。

上述の説話で僧真慈の至極の発願に弥勒仙花の姿が童子に化身したものを見ることが出来る。遺事の記録では真慈が水源寺の門前では一郎に会い、靈妙寺では一小郎子に会ったとしている。一郎と一小郎子を筆者は童子と表現した。僧真慈が誓願した弥勒仙花は国仙になったというが、国仙は花郎の親方であった。弥勒仙花の化現である童子はその名前が末戸で、花郎徒を率いた国仙になり花郎を導いたという内容であるが、これは新羅の国家的経営という視点で花郎徒を理解す

るのに役立つと思われる。

2. 僧真表の亡身懺を助けた青衣童子

三国遺事の『関東楓岳鉢淵数記』によると、僧真表は新羅景德王代から恵慕王代の高僧であった。真表は全州人で12才で金山寺順濟法師の弟子として出家し沙弥戒を受けた。法師は真表に「供養次第秘法」1巻と「占察善惡業報經」2巻を与え、“君はこの戒法を持って弥勒、地藏菩薩の前に出で切に法を求め懺悔し、直接に戒法を受け世上に広める”と言った。真表は戒法を受ける為、27才になるまで名山を歩き回ったが法を得なかった。その年真表は保安県不思議房に入って精進した。弥勒像の前で3年間戒法を求めるため修行したが授記を得られなかった。真表は授記を得られないのに発憤して岩の下に身を投げ亡身懺をしようとした。身を岩の下に投げると、いきなり青衣童子が現れ掌で受け取り真表を岩の上に上げる。

真表は再び戒法を受ける為の精進をすることにした。21日を昼夜なしに修道し石を叩きながら懺悔したら、3日目に手や腕が折れてしまった。7日になる夜、地藏菩薩が金錫杖を振りながら現れ加護されると折れた手や腕が治った。菩薩は表真に袈裟と法鉢を与えると真表は感動して更に精進した。21日になると、彼は天眼を得て兜率天衆が来るのが見えた。この時、地藏菩薩と弥勒菩薩がほめながら戒本を与え、弥勒菩薩は2木簡を与えて、真表に“この二つ木簡は我が指の骨として、一つは仏種子であるから後には大国王になり兜率に生まれるであろう”と言って二人の菩薩は姿を、消した。表真は律師として金山寺、法住寺など多数の寺刹創建と占察法会を施し、数多い衆生済度に尽力した。表真律師の亡身懺に助力した青衣童子はいきなり現れ身だけ岩の上に上げる。

3. 僧慧明に智慧を悟らせた童子達

仏教通史『灌燭巨像湧石琢成』によると、高麗光宗19年（968）ある女性が般若山の巖を取りに行ったが、その時般若山は西北側ふもとから急に童子の声が聞こえ、其処へ行ってみると、大石が地の底からあがったのである。三つに割れている大石が連結されていた。朝廷では僧慧明に割れている石仏を作るように命じた。

僧慧明は石仏があまり大きくて建て組み合わせるのに苦勞を重ねた。ある日、慧明が道を歩いているところ、目の前に童子達が現れ三つに割れている石を前に置いて砂遊びをしながら、仏像を建てようと言う声が聞こえてきた。童子達は先ず下の部分の石を正しく建て置いては砂でかぶせ、丘を作り、二つ目の石をその上に載せ、又砂でかぶせその上に三つ目の石を載せ、砂丘を無くすとたちまち三

つに割れていた石が一つの仏像として現れた。

慧明大師が啓示を得て喜んでいるうちいつの間にか童子達は姿を消してしまった。慧明は土匠 100 名と共に仏像を造成したが、凡そ 37 年もかかったそうである。この仏像は文献によると、観音と言われているが、一般には“恩律弥勒”としてよく知られている。童子の音声を通して仏像の出土を知ることが出来、又童子によって土を積み仏像を完成した灌燭寺の大仏は弥勒として広く知られている。

4. 月明師の茶と念珠を持って姿を消した童子

三国遺史月明師の兜率歌條によると新羅景德王 19 年に太陽が二つ現れて 10 日間続き、ある日官が王に因縁ある僧を招き花を散らしながら精進すれば災厄が無くなるといった。月明を呼んで祈祷文を作らせたなら、月明が“我は国仙であるから郷歌は知っているが梵声は知らない”という。月明が兜率歌を作り上げると太陽の怪変が無くなった。王がこれを不思議に思い茶や水晶念珠 108 個を下賜した。その時ふと綺麗な身なりのある童子が現れ丁寧に茶や念珠を受け内院塔の中に姿を消してしまった。茶や念珠は内院塔南側壁画弥勒像の前に置いてあった。これは月明の至極の徳と精進が弥勒菩薩を感動させたものだととして、王は更に彼を敬して再び絹糸 100 匹下賜してその意を表した。

5. 堀山祖師梵日を動かした金色童子

三国遺事「洛山二大聖、観音、正趣、調信條」によれば、堀山祖師梵日が唐に渡り（827—835）明州開国寺に行ったら、左耳のない僧が末席に座って祖師に「我も郷人です。家は溟州界翼嶺県徳耆房です。後日祖師に本国に帰ると我が家を建てて下さい」といった。堀山祖師は帰国して先ず堀山寺を創建し仏教を伝播した。ある日の夜、前に夢で見た僧が窓下に現れ“前に明州開国寺で祖師が我と約束した事があるがどうしてこんなに遅いですか”といった。

堀山祖師が人を連れて翼嶺を訪ねた。ある女人が洛山下に住んでいるのでその名前を聞いたら徳耆と答えた。その女人に 8 才になる子供が 1 人いて常に村の石橋下で遊んだが、ある日彼の母親徳耆に「僕と一緒に遊ぶ子の中に金色童子がいる」といった。徳耆から此の話を聞いた祖師は直ぐ橋下に行った。子供達が遊んでいる所に行って探してみたら水の中に石仏があった。出してみると左耳が無く、前に明州開国寺で見た僧と同じく彼は正趣菩薩像であった。祖師は仏殿三間を建てその像を仕えた。

6. 世祖が会った文殊童子

仏教通史『月精寺見文殊童子條』によると、朝鮮朝 7 代王世祖は醜い皮膚病で

苦しんだ。五台山文殊道場で祈祷しようと月精寺の上院寺に住んでいた。上院寺溪谷で御衣をぬぎ沐浴するとき、忽然とある沙彌が通り過ぎるのをみて、王が沙彌を呼んで洗って欲しいと頼んだ。沙彌の助けて身の皮膚病が治り王は有り難いといい「人々に王の身を洗ったと言わないように」と言ったら、童子が「人々に文殊童子にあったと言わないように」と答えて忽然と姿を消してしまった。世祖は驚いたがその後文殊童子は会うことが出来なかった。世祖は画工達に文殊童子像を描かせ上院寺に奉安するようにした。現在にも上院寺では世祖の意による文殊童子像があり此の像は国宝に指定されている。

三、結論

以上の資料から分かるように、韓国仏教説話では童子を登場させるのが興味深い。説話の内容は、絶えず修行を通して得意の境地を得ようとする過程である障碍を受けたり、国家的危機又は個人の安危が威かされるとき、それを克服可能な希望や勇気を与える主人公が童子として登場する形をとる。仏教説話に現れる童子像は文殊童子、青衣童子の様な仏典上の童子像も登場するが、その他、美少年一郎など新羅特有の少年像を仏典の童子像と対比して表現していることも興味深い。何故ならばこれは仏教の土着化を意味することと思うからである。ところがこの様な童子像は文殊菩薩の化現、乃至、弥勒菩薩の化現という特徴を持っている。それは菩薩の本願力が仏心即ち童心という様式を借りて顕現されたものと信じられる。

文殊童子の場合は排仏の朝鮮時代における仏教を代表する一つの事例であるが「三国遺事」中のある新羅時代説話に登場する童子は、皆が彌勒の化現である点に注目すべきである。それは国家的、個人的な危機を克服するのに常に希望を与えた信仰が弥勒信仰であり、その脈絡で弥勒菩薩の化現である童子像を理解することが出来る。ところが新羅時代の仏教説話の主人公はたしかに仏典上の童子像のように菩薩の化現を意味しているが、仏典上の童子名を使わずに少年、一郎と表現している特徴を持つ。これは少年一花郎→弥勒という説話の類型構造がそれをよく現しているように花郎として生まれた少年が弥勒であったという新羅の花郎思想が仏教説話の土台として存在していたことを物語る。僧真慈條の説話がそれを代表するものと言えるが、修行過程に現れる童子像も、花郎の修行精神と無関係でないことが考えられ、仏教の弘布過程で形成された新羅時代の仏教説話は、一方で花郎精神の弘布過程を伝えているものと信じられ興味深い。龍華之徒が花

郎徒の中でも頭角を現していたという事実もそれをよく語っている。

[参考文献]: 『三国遺事』, 『東国与地勝覧』

金東旭 解説「三国遺事と文芸的価値解明」セムン社

〈キーワード〉 童子, 仏教説話, 説話と童子

(中央僧伽大学教授, 文博)

—新刊紹介—

Moriichi YAMAZAKI and Yumi OUSAKA

PHILOLOGICA ASIATICA

Monograph Series 15

A WORD INDEX AND REVERSE

WORD INDEX TO EARLY JAIN

CANONICAL TEXTS

Āyāraṅga, Suyagaḍa, Uttarajjhāyā,

Dasaveyāliya, and Isibhāsiyāim

A4判・410頁・非売品

中央学術研究所・平成11年10月23日